曹洞禅者と泰山霊巌寺

永　井　政　之

南宋代より元・明代における河北での曹洞禅者の動向については、すでに考えるところであつたがこの小論では、諸山に列せられた少林寺の隆盛の一時代前、すでに曹洞禅者の活動の拠点となつていた山東省済南府長清県の泰山霊巌寺について考えてみたい。さて、霊巌寺については康熙25年（1696）成立の〔霊巌志〕（6巻）があり、また此地の金石文を揖めた〔山左金石志〕〔山左訪碑録〕等があるが、特に注目すべきは嘉靖34年（1555）成立の東洋文庫蔵〔泰山志〕（20巻）の存在である。特にその巻15―18に収される多くの碑文と、それらに対する編者の考証の部分は、南宋以後、霊巌寺住持となつた禅者の伝歴を述べて詳細である。

いつたい霊巌寺は、古く魏孝明帝の正光元年（520）法定の創建になるといわれ、のち玄奘・恵浄・仁欽・延珣・僧志・行詳といつた人々の住山が知られる。これらの人々については割愛し、今、時代を北宋以後に限定するなら、まず注目すべきは明昌7年（1195）建碑の「十方霊巌寺碑」の記述である。同碑はすでに常盤大定氏〔支那仏教史蹟踏査記〕（266頁）が指摘するように、霊巌寺が此地の巨刹であり、かつ十方住持刹であることを述べ、さらに熙寧6年（1073）に雲門宗の仰天元が入院して以後、霊巌寺は禅院となつたとする。仰天元については全く不明であるが、今〔泰山志〕収録の塔銘やその他の資料を利用して世代を考えてみると、今後の補正を必要とする面もあろうが左表のごとくなる。

世代	禅者	宗派	（生没年）	入院	資料（略称）
1	仰天　元	雲	（？-1145）	1073	十方霊巌寺碑
	霊巌顕顒	雲			続灯録18等
	霊巌志愿	雲			続伝灯録12等
	霊巌重確	臨黄			続灯録13等
8	方山浄如	臨黄	（？-1141）	1135	妙空禅師塔銘（欠）
9	定光道珣	臨黄	（1086-1142）	1141	第九代定光禅師塔銘
10	巨済法雲	臨黄	（？-1145？）	1146以前	第十代雲禅師塔銘
	霊巌　応	曹	（？）		続伝灯録12

14	大明　宝	曹	(1114-1173)1149	霊巌寺宝公開堂疏
15	霊巌裕顕	?(?)	1151以前	霊巌寺山場界至図（?）
16	霊巌法琛	?(?)	1157以前	霊巌寺釈迦宗派図（?）
17	方山恵才	曹(1123-1186)	1178以前	霊巌寺方丈恵才詩刻
18	万安浦滌	曹(?)	1183	霊巌寺滌公開堂疏
19	霊巌広方	曹(?)	1187以前	才公禅師塔銘（欠）
20	霊巌広琛	臨(?)1192-1194住持		十方霊巌寺碑
	清安　方	曹?(?-1281)1236以前		清安禅師塔銘（欠）
	霊巌　福	?(1228-?) 1260?		福公禅師塔銘（欠）
	復庵円照	曹(1206-1283) ?		霊巌寺僧復庵詩刻
	足庵浄粛	曹(?) ?		粛公禅師道行碑
	済川正広	曹?(1225-?)		広公提照寿碑
29	月泉新仝	曹(?-1285)		新公禅師塔銘（欠）
30	宝峰　順	曹?(?) 1285		新公禅師塔銘（欠）
31	桂庵覚達	曹(?) 1294?		第三一代達公道行碑
32	普耀福海	曹(1242-1309) 1298		第三二代海公道行碑
33	古巌普就	曹 1302		第三三代就公道行碑
34	涌泉智慧	曹?(1261?-?)1314		第三四代慧公寿碑塔銘
	彦高智挙	曹(?)		挙公寿塔碑
	無為法容	曹(?) 1322?住持		容公禅師塔銘（欠）
	古淵智久	曹?(?) 1326-1231		慧公寿碑塔銘の建碑
	霊巌子揮	曹(?)		揮公塔記（欠）
	息庵義譲	曹(1284-1340)1336退院		第三九代譲公道行碑
	定巌徳慧	曹(?) 1336		慧公道行碑（欠）
	霊巌思泉	曹?(?)		泉公首座懇績記
	霊巌思亨	曹?(?)		亨公寿塔記
	吉甫子貞	曹(?)		貞公塔銘（欠）
	霊巌　復	曹(?)		五灯全書61
	方山思璧	?(?) 1351		慧公道行碑の建碑
	霊巌霊泉	?(?) 1355		題霊巌寺詩の建碑
	霊巌妙恭	?(?) 1358		宿霊巌寺碑の建碑
	秋江　潔	曹(?)		会元続略1・五灯全書61

前表によれば、霊巌寺を拠点として活躍するのは、まず雲門宗の人々、ついで臨済宗黄竜派、さらに曹洞宗の人々であることが分る。このうち2世―7世の間に擬しうる人としてはまず顕顒・志愿の存在がある。顕顒は長蘆宗信の嗣、志愿は長蘆応夫の嗣で〔続灯録〕(18)等に立伝されているという以上は不明であるがいづれも北宋代の人であり、仰天元に引き続いての晋住であつたろう。いずれにしても初祖より8世までの間にあと3名の禅者を補足する課題が残される。

黄竜派の禅者としては、まず重確がある。重確はすでに〔続灯録〕(13)等に立伝されており、彼が善光・黄檗・霊巌・十方浄因禅院の諸刹に歴住したことが知られる。さらに浄如には皇統2年(1142)建碑の塔銘があつたとされ、その全文は知られないけれども「考証」の部分でその略伝が記され、〔新続高僧伝四集〕(16)では道珣とともに立伝されている。それらによれば、浄如の霊巌寺晋住が大徳元年(1135)であり、皇統元年(1141)に示寂したことが知られる。

定光道珣には「済南府十方霊巌禅寺第九代定光禅師塔銘」がある。道珣は皇統元年、浄如没後の霊巌寺に入り、皇統2年6月23日示寂、世寿57、坐夏32であった。次に「済南府霊巌山省差住持伝法第十代雲禅師塔銘」の現存する巨済法雲がいる。この人の碑銘は下の部分が欠損しているために、その嗣承を智海智清の法嗣とすべきか、それとも智清の孫弟子とすべきか確定しえないが、いずれにせよ皇統6年（1146）には「霊巌寺傅大士梵相十勧碑」を建立しており、その時点ですでに住持職を務め、多分塔銘建碑の前年（皇統8年1148）八月に示寂したと思われる。黄竜派の禅者についてはその梗概のみを述べたが、今その嗣承を記しておこう。

黄竜慧南
- 霊岩重確
- 開元子琦—薦福道英—方山浄如
- 東林常総—広鑑行英—法華永言—定光道珣
- 雲居元祐—智海智清……○○○○……巨済法雲

さて、法雲以後、霊巌寺に晋住した人としては、〔続伝灯録〕（12）にその名のみを記す、芙蓉道楷の嗣の霊巌応の存在を考えなくてはならない。この人については伝歴等一切が不明であるが、道楷（1043—1118）の弟子であることを考慮すると、やはり大明宝以前の住持として考えてよいであろう。

皇統9年（1149）に入院した人として大明宝（1114—1173）がいる。宝については、すでに石井修道氏「芙蓉道楷とその弟子たち」（曹洞宗研究紀要5）が論考するごとく、〔金文最〕（56）にその塔銘が、また〔金石萃編〕（154）には霊巌寺入院の際の開堂疏が収録されており、〔泰山志〕もやはり同様の開堂疏を収めている。大明宝についで霊巌寺に住した人としては、天徳3年（1151）以前に入院し、同年に「霊巌寺山場界至図」（本文欠）を建碑したという裕顕と、正隆元年（1157）以前に入院し、同年に「霊巌寺釈迦宗派図」（本文欠）を建碑したという法琛の存在が知られる。この二禅者についても殆んど不明である。

17世に確定しうるのは大明宝の法嗣の方山恵才（1123-1186）である。恵才については〔金文最〕（56）に「長清県霊巌才公禅師塔銘」のあることが石井氏によって指摘され、〔泰山志〕は、恵才自筆になる「霊巌寺方丈恵才詩刻」の碑が、大定18年（1178）に建立されたことを伝えており、さらに大定27年（1187）11月に建碑されたという恵才の塔銘は、その本文は収録されていないが、考証の部分で、

詩刻於大定十八年、其時恵才正居方丈、自号方山野人、至是二十七年乃示寂於興化矣、才公住霊巌為第十七代、

と述べられている。とすると、大明宝→裕顕→法琛→恵才の住持次第は動かしえないように思われ、宝をして14世に擬しうるであろう。恵才以後の人々については紙数の関係もあり、別の機会に述べる。

（細注省略・未完）